

■ 歌詞和訳： " A Forest " by The Cure (08 Feb. 2017)

■ 「A forest」のレコジャケとコレクター話

この曲のシングル盤カバー・ジャケットにはデザインのクレジットが載ってないが、2nd アルバム・アルバム "Seventeen Seconds (1980)" からシングルカットされたものなので、アルバムのデザインを担当していたビル・スミスによるものだと思う。写真のポジ・ネガ像を表と裏に配置し、バンド・ロゴを入れただけのシンプルなデザイン。ここしか置く場所がない、という位絶妙な場所にレイアウトされた白抜きのロゴは、正方形の枠内で、写真下半分の暗くなった部分と上の明るい部分との濃度バランスを保っている。そして、曲名が（良く見ないとわからないくらい）すごく小さくなっている点からも、全体のデザインを優先して作られたんだと思える（メジャー・レーベルだと曲名を大きくしろなど、営業優先的な意見の方が強くあって、デザインとしてバランスの悪い仕上がりになることが多い）。この雰囲気たっぷりの森の写真は、想像力を引きだてる何かがあるような。ポジ像反転した裏ジャケの黒い部分を拡大しく見ると、そこには写ってはいないはずのものが…ギャー！ てなことはありません。

ザ・キュアーのスリーヴ付・初期シングル（1980 年はじめ頃まで）は、僕が学生時代、レコードをよく買っていたときからすでにレアだったため、なかなか手が出なかった。なので、こうして web 上でこの時期のジャケを見ただけでも、条件反射で思わずオオッ！ とため息が出てしまう。刷り込みって怖い。「A Forest」のアナログは見かけなくはなかったが、店頭では 5,000 円位してた。日本の中古レコード屋で値付けされていたレコードの価格を、今一度考えてみると、数の少なさに対する欲しい人の割合、つまり需要と供給からくる適度な価格調整はもちろんあっただろうし、それが一番反映されるものだと思うが、もう一つ、海外買い付け費用が上乗せされていて、それが大まかな価格ラインを保ち底上げしていたのはもっと想像つく。今のように航空運賃は安くはなかったし、為替の手数料、滞在費は当然のこと、日本への送料だって重量あったらだろうからバカにはできない（特にユーロ誕生前のヨーロッパのローカル・カレンシーと日本円の交換には相当手数料がかかっていたように思う）。現地のレコードはまだ安くても、日本に送られ店に並ぶとどうしても、倍々くらいにはなっている。値段がそういうもんだと一度認識してしまえば、それがいわゆる相場価格になって、買う側にも定着してしまうし、また基準にもなってしまう。僕たちが店頭で見ていたレア・レコードの値段っていうのは、どこまでが本来のものだったんだろう？ 最近のネット・オークションなどでの落札額をみていると、当時も今もさほど変動ないものが意外とあって、このあたり、状態のいいレコードの希少度はより増してはいるが、今度は求める人が微減してきている表れなのかなとか、まあケースバイケースにはなるんだと思うけれども、価格の変遷を色々想像し見ていくと面白い。

そういえば、イギリス盤のフインチ・シングルは初回プレス分にだけ紙のジャケットが付いている場合が多い。これにはひとつ理由がある。シングル曲の売れる期間というのはよっぽどのヒット曲でない限りそう長くはないため、レコード会社は早々と売り切って、在庫を抱えたくはない。そのため（特にインディ・レーベルの場合は）プレス数は多く見積られない。初回生産分は捌けたものの、売れ行きの勢いが続くとは期待できないがバックオーダーがある程度あった時など、シングルの再プレス盤にはたいてい（印刷コストを抑えた）内袋だけしかない、ジャケなしのレコードが市場に出回る。

■ 「A forest」のちょっとした思い出 僕にとって「A Forest」は、けっこう思い出ある曲で、聴くとその当時、学生だったときの記憶が甦ってくる。その昔、クラスメート 3 人とバンドを組んでいたことがあって、そのときに演奏していたのがザ・キュアーの曲だった。確か「A Forest」と「The Walk」という 2 曲を最初に演っていた。皆ビギナーだったから難しくない曲を、という理由でまず選んだ。僕たちのバンドは楽器のパートでもめることは無く、ドラムス、ギター、ベース、キーボードとそれぞれ第一希望の楽器ですんなりと振り分けできた、誰がヴォーカルを取るかという問題だけを残して。そうして、いざスタジオに入り練習していくうちに、ちょっと別な問題が出てくる。僕のいたクラスは女子の数が 3/4 ほどと、男子の割合が少ない状態で、ごく一般的な学級構成とは違っていた。その数少ないクラスメートの中でメンバーを集めたものだから、音楽の趣味とバンドへの真剣度合いがどうにもかみ合わず、僕を含めた手探りでのんびりやって行こう派と、いや、テクを追求して学校で一番になろうぜ派の二つに分かれるようになってしまい、段々と方向性が合わなくなってゆく。結局この小さな溝は埋まらず、学園祭のステージに出ることを最初の目標にはしていたものの、バンドは夏休みになる前に自然消滅した。僕にとっては、自分に楽器演奏の才能はないという事がはっきりと分かったので、とてもいい機会だった。

今回改めて歌詞を見てみると、ザ・キュアーの詞ってシンプルだけど、想像力膨らむというか、頭の違ったところで別なイメージが湧くところがある。この曲は不思議の国のアリスとカフカっぽい雰囲気があって、シュールな世界へと入っていけそうだ。

■ ザ・キュアー「A Forest（少女喪失の森）」歌詞和訳

The Cure "A Forest" - lyrics (Songmeaning.com) <http://songmeanings.com/songs/view/7498/>

上の邦題は歌詞の内容からイメージして、僕が勝手に付けたもの。

キュアーの歌が持つファンタジー性やユーモアがうまく出てるような感じがして、個人的には気に入っているんだけど、どうだろう。

Come closer and see, see into the trees, find the girl while you can Come closer and see, see into the dark, just follow your eyes
I hear her voice calling my name, the sound is deep in the dark I hear her voice and start to run into the trees

近づいて見てごらん、茂みの中をじっくりと。女の子を見つけてみて。近づいて見てごらん。暗闇の中を覗きこんで、視線をたどるんだ。
僕の名を呼ぶ彼女の声が聞こえる。その声は低く暗闇の中で漂う。彼女の声を聞き、僕は茂みの中へと走り出す。

Suddenly I stop but I know it's too late, I'm lost in a forest all alone The girl was never there, it's always the same
I'm running towards nothing again and again and...

僕はふいに立ち止まる、もう手遅れだと分かっているけれど。僕はたった一人、森の中で迷ってしまった。女の子はそこにはいなかった。いつも同じだ。
僕はどこを目指していいのかわからず、ただ走っている、何度も何度も…。

ローリング・ストーン誌が行った「読者が選ぶザ・キュアーのベスト・ソング」で「A Forest」は 2 位に選ばれている。ザ・キュアーにはメロディのいいポップな曲が他に沢山あるし、さほどポップでもなくまた大ヒットをしたわけでもないこの曲がなんで人気なんだろ？ と、この結果にはちょっとビックリしたが、まあ、ファンはちゃんと分かっているということか。

■ Readers' Poll: The 10 Best Cure Songs (Rolling Stone, June 2016)

<http://www.rollingstone.com/music/lists/readers-poll-the-10-best-cure-songs-20160629/a-forest-20160629>